別紙様式６

# 平成２０年度　博 士 課 程 学 位 論 文 要 旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

高齢女性の日常生活活動に対する自己効力感に関連する要因の分析
～運動機能と痛みの観点から～

学位の種類：　博士（保健科学）
保健科学研究科　保健科学専攻　障害予防・機能回復科学分野
研究生番号
氏　名：　田口孝行
（指導教員名：　柳澤　健　教授　）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式１枚（Ａ４版）に収めること

要旨

【目的】本研究では、高齢女性の日常生活活動に対する自己効力感（動作が「できる」という自信の程度）に関連する要因について、運動機能と痛みの側面から検討することを目的とした。【対象】対象は、日常生活が自立している 60～78 歳の女性 114 名とした。対象者には本研究の主旨を説明し、本研究に参加することの同意を口頭で得た。【方法】日常生活動作に対する自己効力感の指標として、易転倒性指標（FES：Falls Efficacy Scale）の質問表の９項目（電話の対応を除く）を使用した。痛みについては、痛みの有無と痛みの部位（肩関節部・腰部・膝関節部）について質問紙による調査を実施した。運動機能については、1)握力、2)閉眼片足立位保持時間、3)Functional Reach Test (FRT)、4)10m 最大歩行時間、5)Timed Up & Go（TUG）の測定を実施した。FES は９質問項目すべてに「大変自信がある」と回答した群（A 群）、９質問項目に「大変自信がある」と「まあまあ自信がある」が混在している群（B 群）、９質問項目のいずれかに「全く自信がない」または「あまり自信がない」と回答した群（C 群）に分類した。FES３群間における年齢と運動機能を比較するために、一元配置分散分析後、Scheffé の多重比較検定を行った。FESC 群に分類される関連要因を検討するため C 群に分類されるか否かを目的変数、運動機能と痛みの部位を説明変数として、年齢で調整したロジスティック回帰分析（強制投入法）を行った。さらに、FES の９質問項目それぞれについて「あまり自信がない」または「全く自信がない」との回答の有無を目的変数、運動機能と痛みの部位を説明変数として、同様のロジスティック回帰分析を行った。【結果】FES３群において、10m 最大歩行時間と TUG で、A、B 群より C 群が有意に高値を示した（$p<0.05$）。C 群に分類される関連要因として、10m 最大歩行時間と TUG、痛みの有無、膝関節痛の有無で有意なオッズ比を示した（$p<0.05$）。また、９質問項目すべてに共通して 10m最大時間のオッズ比が有意であり、「座ったり、立ったりする」と「家のまわりを歩く」については、10m最大歩行時間と TUG、膝関節痛のオッズ比が有意であった。【考察】高齢女性における「日常生活活動に対する自己効力感」に関連する要因は、歩行能力・複合動作能力・痛みの有無・膝関節周囲部痛の有無であることが示された。日常生活活動に自信のない者については、「日常生活活動に対する自己効力感」を高めるために、歩行能力と複合動作能力の向上と痛み（特に膝関節痛）の改善が必要であることが示された。